世界の街角から

誰にとってもやさしいものは贅沢ではなく必須のもの、という考えを暮らしや住宅作りの出発点にする

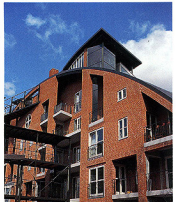
デンマーク王室美術学校アカデミー建築学科
建築学科
在学中
鎌田貴子

普段一箇所を回ってデンマークの例を上げ、いわゆる政策要綱の形だけのバリアフリーを考えるのではなく、「社会的・精神的なバリアフリーを考慮する必要性」そしてそれを実現させてくれる各方面の人々の存在について述べました。今回はもう一歩踏み込んで、このテーマにおける「心の豊かさ」を見つめたいと思います。

生活の質を高めて人生を送る

それは、別に新しいことでも特別なことでもないのですが、どんな場合も誰に対しても、常にクォリティ・オブ・ライフ（生活・人生の質）を考慮する、もっと言えばそれが、一番最初に来るということです。

日本ではこのクォリティ・オブ・ライフという言葉は、特に高齢者層などへの治療を考える時に使われてきましたし、もやみに言葉だけの治療を施したりするのではなく、


一人ひとりの住まいです。

例えば「食」の楽しみを残すために胃に穴を開けないから、残りの日々を楽に過ごせるようにするなど、何が患者にとって一番いいことなのか、社会的にどうあるべきかを問うものです。

このところ、日本でもよく言われる言葉ですが、このデンマークでは誰に対しても当然されています。

それでは一体クォリティ（よりよい質）とはどういうことでしょうか。経済をよくし、車椅子でも健常者と同様の生活が送れる、いつでもどこでもできることが病気のために不可能にならない、という状況づくりの提供と理解することができるかどうか、つまり、車椅子や病気といった一見マイナスの状況

建築学科の学生の作品。

建築学科の学生の作品。

建築学科の学生の作品。

建築学科の学生の作品。

建築学科の学生の作品。

建築学科の学生の作品。

一人ひとりの住まいです。

建築学科の学生の作品。

建築学科の学生の作品。

建築学科の学生の作品。

くてもできるはずですし、これまでも言われてきたことかもしれません。

このニューハウジングは、BO-EN という建築家グループでして、首都コペンハーゲンの街中に位置し、斬新なデザインながら自然の息吹には、まさに調和されています。

そこでの調整が図られています。エコロジーの考えを取り入れ、ソーラーシステムが配備され、雨水の再利用がなされています。このニューハウジングもコーハウジングの形態を取っていて、事前に後の住人となる若者が集まり、何わ月分かたって、話し合われました。その結果が、一階にある大きなパーティー室と最上階のプールです。小さな自習の部屋はもちろんですが、街の中に住む彼らにとってはちょっとした運動とリラックスできる空間になっています。

身体障害者のための施設

建築学科の学生の作品。

建築学科の学生の作品。

建築学科の学生の作品。

生活を楽しむための配慮が行き届いている

さて前置きが長くなりましたが、そのような考えを基に、最近できたニューハウジングと、身体障害者のための施設村を見てきました。

このニューハウジングは、BO-EN という建築家グループでして、首都コペンハーゲンの街中に位置し、斬新なデザインながら自然の息吹には、まさに調和されています。

そこでの調整が図られています。エコロジーの考えを取り入れ、ソーラーシステムが配備され、雨水の再利用がなされています。このニューハウジングもコーハウジングの形態を取っていて、事前に後の住人となる若者が集まり、何わ月分かたって、話し合われました。その結果が、一階にある大きなパーティー室と最上階のプールです。小さな自習の部屋はもちろんですが、街の中に住む彼らにとってはちょっとした運動とリラックスできる空間になっています。

身体障害者のための施設村は、これは、コペンハーゲンのあるニュラム島とオーデンセのあるフユン島を結ぶオーデンセ・ベルト橋のふもとに、ついこの最近建てられました。建築家のグループ BIG と JDS による、また注目の二つの一しょ完成していませんが、もう既にゲストハウスだけは使われています。

ここはコペンハーゲンの街から離れ、ソーラーシステムが配備されています。材料も体に良いものが使われています。

景観がとても美しく、小道を辿って行けば、すぐ傍に出ます。また小道も、そして海水浴を利用するための施設も整備されています。

外では花壇やバーベキューができるスペースがデザインされています。また、子供の遊び場や、築山屋、ハーフコーターなども作られています。

写真は内側寄の部分が特徴的な、大きなガラスのスルームですが、窓から光が入り、明るく、そして全面白いことと各施設とに全面連で設備やアーティストにて施されています。

建築学科の学生の作品。

建築学科の学生の作品。

身体の精神にいいものはプラスアルファではなくベーシック

デザインアーバーは一番最後、全ての人の夢が整った後にくるもの、という考えが多かりました。寝室をまずなくない時にデザインやアートはいらない、余分だ、贅沢だということです。こういう考えのため、病院は病気が治ればそれでいい、と考えられていました。つまり、マイナスからゼロで十分だということでした。

しかし、考えてみてください。病気の時に一輪の花、一枚の絵・一面の空業に窓められた、病気など忘れ、晴れ晴れとした気持ちにならことはありませんか。

もちろんこれでは元気な時にも、ということは、誰にとっても同じことです。しかし、誰にとっていいもの、やさしいものはプラスアルファのものでなく、必須なものとある程度の予算は、いつでもどこでもできるはずです。

いや、それには金がかかるから……と言われるかもしれませんが、お金をかけてあげ作家の絵を掛ける必要はありません。お金をかけ

建築学科の学生の作品。